

ポスト・モダンにおける聖書解釈の探求 ルターの聖餐論を媒介にして

大塚 篤

序論

ポスト・モダンとは、終焉をむかえた啓蒙主義のパラダイムに対して、新たなパラダイムへのシフトを模索している極めて複合的な思想の混迷時代である。啓蒙主義に出発点を持つ近代の特質は、今や批判にさらされている。この傾向は、最初自然科学の分野から始まり、あらゆる分野に波紋を投げかけ、聖書解釈学の分野までも及んでいる。近代の批評学の結果、結局『聖書の本文と解釈』が一般の古文書解明の作業と同等のレベルまで引き下げられ、神の言葉とありのままに取り組み、神の声を聞くことが失われ、近代の科学同様、閉塞的状况と自己崩壊の方向へと追い込まれている。終焉をむかえている啓蒙主義のパラダイムを、新しいパラダイムへとシフトする必要性に迫られつつも、

ポスト・モダンのパラダイムは、今なお形成されつつあり、最終的にどのような形態を取るかはなはだ不安定な状況にある。

デービッド・ボッシュは、ポスト・モダンの啓蒙主義への七つの挑戦を提示しているが⁽¹⁾、それによってポスト・モダンの性格と方向性を知る事が出来る。すなわち、ポスト・モダンとは、包括的統一的論理的思索の拡大、不確実性と予測不可能性の範疇の再導入、神学的次元の再認識、進歩思考への挑戦、信託の枠組、啓蒙主義的楽観論と反啓蒙主義的悲観論を越える道の模索、間主観的存在としての認識からの相互関係のための理性を求めている思想的傾向である。しかし、ポスト・モダンそのものが、現在途上の出来事であるゆえに、いまだ「ポスト・モダンにおける聖書解釈」そのものを定義出来る状況ではない。

ポスト・モダンの聖書解釈の在り方を考えるにあたって、何故ルターなのか。それは、ルターが中世のパラダイムから、近代のパラダイムへと大きくシフトする過渡期に位置しているからである。ボッシュが指摘することく、新約時代から教父時代への転換期と、中世から近世への転換期に思想的な大シフトが存在した。前者は、ヘレニズムへの転換であり、脱歴史化の過程である。後者は、デカルトの *ego ego sum* に始まる近代への転換であり、理性中心、脱人格化への過程である。ルターは、まさに、この中世から近代への裂目に立って宗教改革を推進した。ルターと聖餐論争を戦わしたツヴィングリは、人文主義的背景を持っており、その性格をその聖餐論に色濃く映している。ルターは、ゲーリッシュが論じていることく、全く理性を否定しているのではないが、神の言葉に対する誠実さのゆえに、理性の及ばない領域がある。即ち神の言葉を理性の基準で測ることは出来ないという態度を理性に対して持っている⁽²⁾。このような理性に対する態度のゆえに、「聖書の意味は、四つではなく、ただ一つであり、それは歴史的・文法的な意味だけである」という、極めて理性的、合理的ルターの聖書解釈の原則は、彼にとつてどのような意味を含んでいるのであろうか。

ルターの宗教改革が「み言葉による改革」と呼ばれているように、ルターがみ言葉に捕らえられ、み言葉に生かされ、み言葉に立って、み言葉を語ったところに宗教改革は始まった。かくして、宗教改革の基本原理は、「聖書のみ (sola Scriptura)」に置かれた。しかし、ルターは、ヘブル書、マコ書、ユダ書、黙示録などに対する態度からして、いかなる靈感を信じていたのかという論議が生まれる⁽³⁾。そこには、宗教改革のもつ一つの基本原理である「信仰のみ (sola fide)」を基準とし、「キリスト中心主義」を核として生きて語ることとしての聖書が考えられていると言える。ルターは、「聖書の意味は、四つではなく、ただ一つであり、それは歴史的・文法的な意味だけである」という聖書解釈の原則に立ちつつ、キリストを通して、神の生けるみことばの語りかけそのものを聞くこととしているのである。このようルターの御言葉に対する態度の中に、ポスト・モダンにおける聖書解釈の在り方への示唆があるのではないか。それが、本論文のルターを持ち出した理由である。

更に、聖餐論に限定したのは、聖餐そのものが、サクラメントとして秘儀性を有しており、ルターの聖書解釈の特質を見出す事が出来るからである。その意味で、本論文の主題を、「ルターの聖餐論を媒介にして、ポスト・モダンにおける聖書解釈の探求」としたのである。よって本論文の関心は、聖餐論そのものにはなく、むしろルターが提示した聖書解釈の原理が、今日の意味をなも有しているかどうかという事を問題とし、そこから近代の聖書解釈が見失ったものの再発見をし、ポスト・モダンにおける聖書解釈の在り方を探りたいのである。

加えて時代的ギャップはあるが、近代的聖書解釈の一つの成果であるエレミアスの『イエスの聖餐のことば』を比較的に取り上げた。それによって、ルターの聖書解釈の原則に内包されるポスト・モダンの特質を見出したいのである。

最後に、コンノーデア神学校のジエームス・W・フォルツが、一九九五年に出版した『WHAT DOES THIS MEAN? Principles of Biblical Interpretation in the Post-Modern World』にも触れておきたい。これは、保守的なルター派の学者であるジエームス・W・フォルツが、ポスト・モダンの聖書解釈の原則を見出さんとして、極めて詳細かつ包括的に展開している聖書解釈学のテキストである。これは、ルターの聖書解釈の原理に対するポスト・モダンの再解釈と言って良いのではないだろうか。

一、ルターへの聖餐論に見る聖書解釈の特質

1 ルターにおける聖餐論の展開

ルターにおける聖餐論は、一般に共在説といわれ、一方に化体説、他方に象徴説と対峙している。ローマ・カトリックに対する対決は、一五二五年までに一応の終りをつけており、その後、ツヴィングリや熱狂主義との対決に入っていく。すなわち、その聖餐論を初期と後期に分ける事が出来る。

初期においてルターは、「聖徒の交わり」という概念を中心的に取り上げ、キリストのからだと血との現在(Realpräsenz)という事については、周道的に取り扱われているのみである。カトリックと対決して、ルターは、 sacramentを洗礼と聖餐に限定し、聖餐における信仰を強調している。

他方、後期ルターの聖餐論が論じられるようになる契機は、アンドレアス・カールシュタットが、一五二四年、「聖餐における現在」と「聖餐を恵み的手段と考える事」を否定してよりである。ルターとカールシュタットとの論

争に、エコランバディウスとツヴィングリが加わって争われた。

ルターは、一五二六年『キリストの聖餐の礼典についての説教 熱狂主義的傾向の人々を駁す』を書き、聖餐におけるキリストの現在が理性によって把握されるものではなく、神の言葉への単純な信仰によってのみ把握されることを主張した。さらに、ツヴィングリが持ち込んだ「属性の交換」の概念に関して両者の間に論争が起こった。この様な背景の下で書かれたのが、ルターの『キリストの聖餐について、信仰告白』(一五二八年)である。それは、三部より構成されており、第一部で、ルターは、ツヴィングリの「属性の交替」の概念を攻撃し、キリストはその本性においても本質においても、一つのペルソナの中で真の神・真の人であると主張した。ルターは、「中で、ともに」ということをかならずしも固守しないで、聖餐のことは本文を単純に文字通りに受け取るべきことを主張している。ここにおいて、ルターは、聖餐におけるキリストの現在を説明するために、「実際の一体性」「礼典的一体性」の考えを持ち出すのである。第二部では、聖餐のことは神自身自身から出たことであり、聖書にあるままの文字とことば通りに受け取るべきことを主張している。第三部は、自らの信仰の告白という形で、教理の全般にわたって自らの信じるところを表明している。

2 ルターへの聖書解釈の特質

次いで、ルターへの聖餐論の中に見られる、聖書解釈の特質を見たい。

(1) 「聖書は、ただ一つの意味を有する」という原則

ルターへの聖書解釈の基本原則であり、「聖書のみ」という宗教改革の基本原則と深い関係を持った聖書解釈の原理である。ルターは、『キリストの聖餐について、信仰告白』(一五二八年)の中で、最初にこの原則を持ち出して論じ

る。すなわち、ルターは、カールシュタットとツヴィングリの間で解釈が一致していない事を批判し、「単一の表現の中で、単一の名前やことばづかいが、同時に、二つの相反する解釈や説明を持つことは不可能だからである」⁽⁴⁾と語っている。さらに続いて、ルターは、「われわれは聖餐において、その聖句が、そのすべてのことば、綴り、文字において、単一、一様、確固、確実なものであることを欲しているのである」⁽⁵⁾とか、「聖書が一つの事柄にたいして多様な名前や表現を与える場合には、それ自体が十分な一致を持っているばかりでなく、それらは決して相反したりはしないのである」⁽⁶⁾と言い、「*es unum*」を意味する「と解釈するツヴィングリの意味説の根拠を聖書の他の箇所で見出だすことができないではないかと論じている。ここに、「聖書は、ただ一つの意味を有する」というルターの聖書解釈の基本原則が表出されている。

(2) 「字義的・文法的解釈は、他のいかなる本文理解に優先する」との原則

ルターは、ツヴィングリが、比喻または隠喩を持ち出すのは文法的に間違っていると述べ、ツヴィングリの *figura* (子表) の考えは、「文法的でも、神学的でも、自然的でもありえないもの」⁽⁷⁾として批判している。

(3) 「個々の全章句は、聖書全体から理解されねばならない」という原則

ルターは、「本文とその解釈がそれを求めない限り、あるいは、それが聖書の他の章句によって強力に証明されない限り、ことばのふつつの古い意味から離れて、ある新しい意味を取ることを禁じている」⁽⁸⁾と述べて、個々の章句は聖書全体の文脈から理解されねばならないという聖書解釈の大原則を示している。この原則は、「聖書は聖書自身の解釈者である」という原則と結び付いている。

(4) 旧新約聖書の統一と啓示の進展性

ルターは、もし、ツヴィングリらの主張するように聖餐が単なる「意味する」だけのものであるならば、旧約聖書

の素晴らしい晩餐を廃して、これに比べれば、意味においても、本質においても全然無意味な晩餐を据えたことになると論じている。そして、「新約聖書は旧約聖書に対してその成就でありその光である」との原則を持ち出し、ツヴィングリらの主張は、そのような原則に反し、「新約聖書をして、旧約聖書を無意味なものにし、曖昧にするものである」⁽⁹⁾と言う。ルターが、旧新約聖書の統一と啓示の進展性を認めている言説である。

(5) 歴史的信条という教会の伝統に基づいた解釈

ルターは、聖餐におけるキリストの現在を、ツヴィングリの『属性の交替』の概念に対応するかたちで論じ、「その上に私が立っている根拠は次のようなものである。第一は、われわれの信仰の次ぎのような条項である。イエス・キリストは、一つ位格の中で、本質的に、本性的に、真の完全な神であり、人であり、両者は分かれず、分離されない事。……」⁽¹⁰⁾と述べ、ニケア信条、カルケドン信条における伝統的なキリスト論の立場に堅く立っていることの表明が見られる。さらに、ルターは、聖餐における素材とキリストとの一体性を「礼典的一体性」と呼んで、伝統的なものを重視する態度を示している。⁽¹¹⁾

(6) ヘブル的思惟の重視

『キリストの聖餐について、信仰告白』の第一部で、ルターは、「これは私の血における新しい契約である」を取り上げ、「これはヘブル語的表現の仕方である」と述べ、詩篇七八・64、ホセア一一・12その他をあげて例証している⁽¹²⁾。さらに、ルターは「ヘブル語の仕方が、キリストのことばをより本来的に伝えており……」⁽¹³⁾と述べて、ヘブル的表現ないしは考え方を重視している。

(7) 聖書にあるままの「語られたことば」の強調

ルターに特徴的な特質は、聖餐のことばが神ご自身の唇から出たことばであり、聖書にあるままのことばを文字通

りに受け取るべきことを主張している点である。』『これは私のからだである』というわれわれの本文が人よりのものでなく、神自身の唇からでたものであり、聖書にあるままの文字とことばにおいて語られ設定されたものである……』と述べている。⁽¹⁴⁾

江口再起氏の『ルターのことば論』を借りて要約すると、「神の言葉」とは、「神の語りかけ」であるとの理解。神の言葉は、それ自体に力がある事。すなわち、読むだけの「しるじことば」でなく、「力ことば」「いのちことば」「行為ことば」であるという事。そこに生ける神の臨在、特にキリストの臨在を認めている。「口のことば」すなわち、「語られたことば」の優位の強調。「ことばと霊の統一としての」「ことば」論。すなわち、「心のことば」と「口のことば」の一致という事である。江口氏は「ことば」ルターのことば論の核心があると言いつつ、すなわち、「内的なことば」と「外的なとば」の同時性の出来事の中での結合である。⁽¹⁵⁾

二、ルターの聖書解釈の特質とエレミアスの聖書解釈との比較

次いで、エレミアスの『イエスの聖餐のことば』に見る聖書解釈の特色を取り上げ、既に見たルターの聖書解釈の特質とを比較し、ポスト・モダンにおける聖書解釈の在り方を問いたい。

- 1 エレミアスの『イエスの聖餐のことば』の展開
- (1) イエスの最後の晩餐と過越の食事との関連性の問い

エレミアスは、まず、キドウシユの食事との関連を主張する説や宗教的会食礼としてのハヴウラーの会食との関連を主張するH・リーツマンの説、エッセネ派が毎日共同で行っていた祝祭的食事である聖宴と関連付けるK・G・クインの説を紹介し、否定的に論証する⁽¹⁶⁾。その上で、エレミアスは、「主イエスの最後の晩餐が、過越の食事であったか否か」に決定を下そうと試み、十四項目にわたって論議し⁽¹⁷⁾、以下の結論を下す。すなわち、過越の食事の特別な要素を解釈する儀式は、イエスがその最後の晩餐においてパンとブドウ酒とに与えた解釈の誘因となった。つまり、ことばの構成の点でイエスは、過越の儀式を模範にしていると主張している⁽¹⁸⁾。

(2) 聖餐記事におけるセム語的要素への注目

エレミアスは、第二章において、聖餐記事に関する文学批評を試み、パウロの聖餐制定記事がセム語的色彩の強いギリシア語であることを指摘し、セム語の原テキストからの翻訳である可能性を示唆している⁽¹⁹⁾。第三章においては、聖餐制定伝承が初代教会の会食礼に用いられるようになってギリシア化が進み、過越の特徴を表す描写が後退したと言つ⁽²⁰⁾。第四章にて、聖餐記事に関する五つのテキストを取り上げ、どの程度セム語的要素を含んでいるか、ギリシア化の傾向を有しているかを比較考察している⁽²¹⁾。

- (3) イエスの聖餐のことばの解釈

第五章において、エレミアスは、「イエスの聖餐のことばの意味」を論じ、以下の四点を指摘している⁽²²⁾。最後の晩餐は、過越の食事と深く関わって、救済論的、かつ終末論的特別の意味を持っていた。最後の晩餐におけるイエスの物断ち宣言は、完全な献身の決意と終末論的展望をもった宣言であった。最後の晩餐における解釈辞言は、予期しない独特の解釈辞言であった。最後の晩餐後の賛美は、過越の食事の後に歌われたハレルと関連しており、終末論的理解が行われている。

2 エレミアスの聖書解釈の特質

(1) テキストに対する緻密なアプローチ

エレミアスは、パレスチナの地理風土、旧約聖書、ユダヤ教、後期ユダヤ教および原始キリスト教の文献からの膨大な資料の収集を総動員して、テキストに対してきわめて緻密なアプローチを行っている。

(2) 聖餐の徹底したパレスチナの環境からの理解

エレミアスは、聖餐のことばをでできるかぎり綿密に釈義するために、イエス時代のパレスチナ世界についての正確な資料を提示することに努力を傾けている。ひたすらテキストだけに耳を傾けることに習熟するために、時代史的資料が不可欠の助けとなると考えており、通時的解釈に立っている。

(3) イエスの言葉をアラム語に戻す試み

エレミアスは、イエスの言葉をアラム語まで遡らせるという試み、イエスが好んで用いた話し方、イエス自身の言葉の目印を挙げ、史的イエスの言葉を再建しようとしている。

(4) 聖餐の過越の食事との関連性を重視

エレミアスは、最後の晩餐の出来事およびイエスの言葉を、過越の食事との関連でもって、強烈に、また、リアルに生き生きと示している。

(5) イエスと過越の小羊との同一化

エレミアスは、綿密な研究を踏まえた上で、イエスのことばの解釈に迫る。特に、過越の食事との関連の中での考察を進め、「これはわたしのからだである」というルターとツヴィングリの論争以来争われている問題に新しい示唆を与えている。すなわち、エレミアスは、『イエスの聖餐のことば』を象徴的でなく、言葉そのものの実体と祭儀的

犠牲の専門用語との関連の中で、過越の小羊と結び付けて考察している。その聖書解釈の根底に救済史的思考がある。(6) 終末における成就の先取りとしての理解

過越の食事そのものの中にすでに、終末論的要素が含まれており、それとの関連の中でよりいっそう最後の晩餐の終末論的性格を明らかにしている。ここにも、彼の救済史的思考が表れている。

3 ルターとエレミアスの解釈の比較

構造主義的解釈の「通時的 (Diachronic)」か「共時的 (Synchronic)」かという区別を前提として、ルターとエレミアスの解釈の比較を試みたい。ルターは、今日的に言えば「共時的」に聖書を理解している。これに対し、エレミアスの方法論は、動機の中に「共時的」なものへの模索を見出だすことが出来るが、あくまで嚴格に「通時的」であるとしている。中世と近代の狭間にあつて、ルターは、いまだ未分化ながら「通時的 (Diachronic)」側面を持ちつつしかも「共時的 (Synchronic)」なものを失うこと無く保持していたと言えるのではないか。

エレミアスの聖書解釈において、注目すべきは、『イエスの聖餐のことば』を、言葉そのものの実体を重視し、かつ祭儀的犠牲の専門用語との関連の中で、過越の小羊と結び付けて考察している救済史的思考である。これは、ルターが、ことばそのものを重視する態度と共通するものがある。この救済史的思考重視の態度を現す言葉として、エレミアスは、次のように言っている。すなわち、「せいぜい考古学のおよび年代学に関心に基づくだけの些細な問いが肝要なのではない。むしろそのうちに聖餐が立っているところの救済史的脈絡が問題なのである」⁽²³⁾と述べている。通時的解釈では十分でなく、共時的解釈の必要性を要請している。「ルターとエレミアスの解釈の比較」と言ったが、単なる対比でない、両者共に時代と立場を越えて、共通するみことばに対する態度が感じられる。そもそもみことば

そのものが、かかるみことばに対する態度を要請していると言って良いのではないか。

二、ポスト・モダンにおける聖書解釈の方向性

ルターの聖書解釈の原理を踏まえ、ポスト・モダンにおける聖書解釈の在り方、すなわち「ポスト・モダンにおける聖書解釈の方向性」を探りたい。

1 ルターの聖書解釈原理からの示唆

まず、ルターの聖書解釈の原理が、ポスト・モダンの聖書解釈に対して示している示唆を考察することから始めたい。

(1) 唯一つの意味を有するという原理

これは、ルターの基本的聖書解釈の原理である。ポスト・モダンの傾向からすれば、この原理は、否定されている。「唯一つの意味」に代わって、「多元の意味」の追及を志向しているからである。しかし、この事は、聖書の正典性とも係わって、福音主義の根幹を揺るがしかねない傾向である。

構造主義的聖書解釈において、この原理は、否定されているように見受けられる。すなわち、書いた主体には、視点の場所は与えられていないからである。しかし、ガダマーの解釈学には、この原理は、受容されているように思う。すなわち、書いた主体の意図というものが先行理解として認められるからである。その先行理解における一つの意味が

あつて始めて、聞くものの地平における多様性が起こるのではなからうか。「ここに、唯一つの意味を有するという

原理」を保持しつつ、しかも、ポスト・モダンのな望望を無視しない解釈の方法があるのではないかと、筆者は考える。すなわち、適用ということを視座においたガダマーの「地平の融合」という解釈概念を高く評価するものである。

(2) 字義的・文法的解釈の優先性

既に見たように、ルターの聖書解釈原理の中で、「字義的・文法的解釈が他のいかなる本文の理解に優先する」という原理は、決して最終的な聖書解釈の段階ではないが、続くすべての解釈原理の土台となるべき原理として、常に優先されるべきものに変りはないであろう。

(3) ヘブル的思惟の重視

これは、イエスの言葉をアラム語に逆行させようとするエレミアスの聖書解釈と類似している。しかし、通時的文化的脈絡の中の聖書解釈というエレミアスの方向性に対し、ルターはことばそのものに関心を向けているところにポスト・モダンの要素に似た含みを有していると言える。

(4) 事柄の霊的・実践的理解すなわち、信仰的・キリスト論的理解

信仰がなくては本当の聖書理解ができないという事や聖書解釈における聖霊の働きという事と関連している。キリスト論的とは、まさに、聖書解釈における必須の事柄である。

(5) 「語られたことば」そのものの重視

ルターには、「語られたことば」そのものへの重視がある。これは、ルターの聖書解釈の中でも特に特色あるものであり、傾聴に値する。ガダマーの解釈の性格もまた、ことばそのものへ開かれた地平での融合という理解に向かっているのではないか。

2 ジェームズ・フォルトツの解釈学

ジェームズ・W・フォルトツが「WHAT DOES THIS MEAN? - Principles of Biblical Interpretation in the Post-Modern World」に提示した、ポスト・モダンにおける聖書解釈の方法論を取り上げたい。この書は、ポスト・モダンを視座においての解釈学教本である。フォルトツは、まず、神の聖なる書を真に解釈することの出来るのは信仰によってであることを言い表して、この本そのものを規定している。この前提の下に、フォルトツは、対話の基礎的三要素（すなわち「著者」「テキストそのもの」「読者」）。聖書解釈のための三段階（テキスト自体の用語、文体、著者の背景などが問題にされる基礎的作業としてのレベル1。孤立した意味でなく、文脈、類型、同一化された言葉によって、文化的意味、神学的意味を問うレベル2。言外の意味、すなわち、intertextuality を問うレベル3）。「読者」の信仰、知識、態度、概念、経験などが解釈の時にテキストに反映するところの「第二のテキスト（second text）」の設定。解釈における「信仰の役割」と「聖霊の働き」さらに、「聖書のキリスト中心性」を提示して独自の解釈学を構築しようとしている⁽²⁴⁾。フォルトツの解釈法は、ガダマーの解釈学における「地平の融合」の理念と極めて類似している。特に「適用」に注目していることは、看過することの出来ない重要な点である。フォルトツは、「第二のテキスト（second text）」と、ガダマーの言う「地平の融合」との間の類似性を認めつつ、ガダマーの「地平の融合」には、聖書解釈が本来立っている伝統という歴史性が失われていると指摘して批判を加えている⁽²⁵⁾。フォルトツの解釈法は、ポスト・モダンを視座においた、ルターの解釈原理の再解釈である。フォルトツは、構造主義やガダマーの用語や概念を用い、ポスト・モダンの視座に立つて、ルターの解釈原理を再解釈することで、ポスト・モダンにおける聖書解釈の方向性を示そうとしているのである。このフォルトツの再解釈は、確かに緻密に論述が積み上げられており、納得的ではあるが、物足りなさを感じる。それは、ルターが一番重視していたと思われる「力ことば」の強調が稀薄化しているからではないか。

ないか。

3 ガダマーの地平の融合

続いて、われわれは、ガダマーの「地平の融合」を挙げなければならない。ガダマーは、デイルタイやM・ハイデッガーの影響の下に独自の解釈学を構築した事で知られる。ガダマーは、「事柄（Sache）に即した真理」をあらわすものとしての解釈学、すなわち「事柄の解釈学」を提唱する⁽²⁶⁾。つまり、「事柄そのものへ」というモットーに従って、対象化された歴史から、生きられた歴史へと移行することによって、「歴史的事実の解釈学」に向かうのである。ガダマーは、ハイデッガーを継承しつつ、「理解とは、現存在の存在の仕方そのものであり、現存在の根源的な遂行形式である」という真理契機から出発する。そして、ガダマーは、彼の解釈学に、「理解」と「解釈」という契機に加え、第三の契機すなわち、「適用」を新たに導入している。ガダマーにとって、この「適用」とは、理解していることを自己の状況に関係付けることである。それゆえに、ガダマーの解釈学は、「適用の解釈学」と呼ばれる。ガダマーは、現存在の「（根源的）理解」の運動そのもの、現存在が変換していく運動そのものに焦点を当てようとするのである。この運動こそ、人間存在の「歴史性」にほかならない。そして、「この歴史性によって」「地平の融合」が喚起されると言うのである。つまり、歴史に規定されつつ、歴史を新たに作っていくという、人間存在のダイナミズムを、ガダマーの解釈学は追及する。このような解釈学的理解から、彼の「地平の融合」の概念が生まれて来る。ガダマーによれば、過去がわれわれに「呼びかけてくる（ansprechen）」事が、解釈学のあらゆる制約の中でも最高の制約であり、「ここから」「理解の運動」が始まると言う。この過去からの「呼びかけ」に「応答して」「聞く」事がなされる時、過去との出会いが生じるのである。そして、「この「聞く」という行為の中に、特定の伝統への「帰属性」「共

通性」「連続性」があるという。つまり、「先行理解」があると言っているのである。この過去の呼びかけに耳を傾けるのは過去と現在の間で断絶が生じているからであると言つ。つまり、過去との全き断絶に理解はなく、過去との全き連続に理解は不要だからである。理解とは、この過去との連続性と断絶の両極の狭間に成立するのである。⁽²⁷⁾

このテキストの呼びかけに対して耳を傾け、問いかけられたその問いを自己への問いとして吟味し、再びテキストに問いかけ直す、現在のわれわれの問いにおいて、テキストの背後にある問いが問い直されるというプロセスにおいて、開かれた問いの地平が形成される。ガダマーは、それを「地平の融合」と呼んだのである。それゆえ、「地平の融合」には、理解の弁証法的性格があらわにされている。これまでの解釈的循環は、全体と部分に限られていたが、いまや過去と現在との間の解釈的循環へと拡大されるのである。過去の真理要求を現在の状況に「適用」する、すなわち「わがものとする」事によって、現在の地平が過去の地平と融合すると言つのである。⁽²⁸⁾

筆者は、ここに、読むだけの「しるじ」ではなく、「力」は、「い」の「さ」は、「行」は「為」であるというルターの真意が、現代的な意味で取り上げられているのではないかと考える。「地平の融合」というガダマーの解釈学は、まさにポスト・モダンの聖書解釈のあるべき方向性を指し示しているのではないか。この「地平の融合」、過去との連続性と断絶の両極の狭間、すなわち過去と現在との間の解釈的循環へと拡大された解釈の在り方の中に、ポスト・モダンの聖書解釈のあるべき方向性があると言える。

四、結論

以上、本稿において、筆者は、ルターの聖餐論を媒介にし、ポスト・モダンの聖書解釈の在り方を考察した。ポスト・モダンという状況の中で、み言葉の解釈が現実から遊離する事なく、同時に実存論的解釈のように歴史が「読者の主体」に溶解されることもなく、しかも、「語り」は「語り」ことばとして常に人々に福音的慰めと希望を語り続ける「生けることば」の解釈であり得るか。それが今一番求められている。ポスト・モダンの聖書解釈の問題は、単に解釈学上の問題ではない。みことばの宣教という我々に委ねられた務めを、この時代にいかにか果たしていくかという事と深く関わっている。同じ意図をルターの聖書解釈の原理の中に見出す事ができる。すなわち、ルターが、聖書解釈において目指したものは「神の語りかけ」そのものの追及であった。ポスト・モダンの聖書解釈において、共時性を強調する余り反歴史的、反客観的、多元的、相対的になる危険性を十分認識し、現代の解釈学の多様性の中にあつて、「文法的・歴史的な意味だけである」とルターの聖書解釈の原理を再認識する必要がある。しかし、「聖書の意味は、四つではなく、ただ一つであり、それは歴史的・文法的な意味だけである」という解釈原理が、ルターにあつては、固定化したものでなく、共時的とも言える含みを持つていたことを認識する時、ルターが「語られたことば」そのものを重視していた事は重要である。橋本昭夫氏は、ルターの聖書解釈原理に言及し、「いま・ここで」のアクチュアルな意味を神の言葉である聖書から汲み取ることの重要性を述べ、「ルターの聖書釈義の基本的トーンは、そのキリストへの集中のゆえに、喜びと自由である」と言っておられる。⁽²⁸⁾ このルターの解放性を、ポスト・モダンの聖書解釈は必要としているのである。ルターの聖書解釈の態度を、ジェームズ・W・フォルトンおよびガダマーの解釈学を引き合いに出しつつ、ポスト・モダンの聖書解釈という視点から考察したが、筆者には、ルター派の聖書学者である

フォルツよりも、むしろ「事柄の解釈学」を提唱するガタマーの「地平の融合」のほうが、よりルターの解釈態度に近いのではないかと考える。ポスト・モダンにおける聖書解釈にとって、「文法的・歴史的」という確かさや、「共時的」というダイナミックさが求められているのではないか。過去との連続性と断絶の両極の狭間、すなわち過去と現在との間の解釈的循環へと拡大された解釈の在り方の中に、ポスト・モダンの聖書解釈のあるべき方向性があると言える。

注

- (1) David Bosch, *Transforming Mission, Paradigm shifts in Theology of Mission*, 1991, Orbis Books, pp. 349-362.
- (2) B.ゲリツィン『理性と恩寵 ルター神学の研究』(聖文舎 一九七四年)八八～八九頁。
- (3) Paul Althaus, *The Theology of Martin Luther*, 1963, English tr. 1966, Fortress Press, pp. 72-102. カール・F・ヴァイスロフ『マルティン・ルターの神学』(いのちのことば社 一九八四年)九九～一一一頁。ウイレム・J・コイマン『ルターと聖書』(聖文舎、一九七一年)三三七～三四五頁。
- (4) ルター「キリストの聖餐について」信仰告白、『ルター著作集第1集 第8巻』(聖文舎 一九七一年)二六頁。
- (5) 前掲書、二九頁。
- (6) 前掲書、三〇頁。
- (7) 前掲書、一八二頁。
- (8) 前掲書、四三頁。

- (9) 前掲書 一七七頁。
 - (10) 前掲書 一〇二頁。
 - (11) 前掲書 二三〇頁。
 - (12) 前掲書 二六一～二六二頁。
 - (13) 前掲書 二六三頁。
 - (14) 前掲書 二六六頁。
 - (15) 江口再起「初めにことばがあったー ルターのロゴス論」『ルター研究』第3巻、(日本ルーテル神学大学ルター研究所 編聖文舎 一九八七年)三五～四二頁。ペリカン『ルターの聖書釈義』(聖文舎 一九七〇年)五八～七九頁。
 - (16) J・エレミアス『イエスの聖餐のことば』日本基督教団出版局、一九七四年)二二～四五頁。
 - (17) 前掲書 五六～八七頁。
 - (18) 前掲書 一二七～一三四頁。
 - (19) 前掲書 一三五～一六二頁。
 - (20) 前掲書 一三六～一四四頁。
 - (21) 前掲書 二一六～二三〇頁。
 - (22) 前掲書 三三三～四二四頁。
 - (23) 前掲書 一三四頁。
 - (24) James W. Veal, *WHAT DOES THIS MEAN? Principles of Biblical Interpretation in the Post-Modern World*, 1995, C.P.H., pp. 18-19, 156-167, 208-209, 223-229, 244-262.
 - (25) *Ibid.*, pp. 342-344.
- 丸山高司『ガタマー 地平の融合』(講談社 一九九七年)五六～五七頁。

- (27) 前掲書、一六六～一六〇頁。
- (28) 前掲書、一四八頁。稲垣久和氏は、ガダマーの解釈学における『適用』の導入を高く評価している。稲垣久和「キリスト教哲学と現代思想」『キリストと世界』第三号、(東京基督教大学紀要、一九九三年)一〇九～一二三頁。
- (29) 橋本昭夫「ルター主義における釈義原理」『福音主義神学』一九九九年)五六～五七頁。

(日本イエス・キリスト教団神戸生田教会牧師)